

アタッチメントを応用した家族療法 － John Byng-Hall の実践を基にした考察 －

立教大学大学院現代心理学研究科 佐藤 大海

Family therapy applying to attachment: Discussion based on John Byng-Hall's practices
Hiromu Sato (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

In this paper, by reviewing John Byng-Hall's theory and clinical approach, I discuss the application of attachment theory to a family therapy setting. According to Byng-Hall (1990) and Byng-Hall & Stevenson-Hinde (1991), insecure attachment relationships influence other relationships in families. For example, he refers to the "capturing" of an attachment figure, parentification, and the too close/too far conflict. In addition, he specifies that a family therapist should be empathic, show responsibility toward families, and have the ability to solve problems of families. In other words, the therapist should serve as an attachment figure to families. If therapists possess these characteristics, they can help families solve their problems independently. John Byng-Hall emphasized that attachment plays an important role in understanding cross-generational transmissions. However, he did not discuss crises of attachment relationships in some developmental stages. In the future, we have to collect attachment relationships crisis which is aroused with family members development by clinical dates and by longitudinal studies about family development based on attachment theory.

Key words : Attachment, Family therapy

問題と目的

アタッチメント理論の概要

アタッチメントとは 日常生活の中で、子どもが何か怖いものに会ったり、転んだりしたときに、泣きながら親に抱っこを求めるというような行動を目にすることがある。Bowlby は、このような、ある個体が危機を感じた際に、別の個体に保護を求めて近づくという行動を、アタッチメント行動と名付けた。本論文では、Bowlby (1980) に倣い、アタッチメント (行動) を、ある個体が危機を感じた際に、特定の個体へ安心感を求めて、近づき、その近接を維持しようとする行動と定義する。なお、本論文では Attachment を、アタッチメントと訳すこととする。これは、数井・

遠藤 (2005) の指摘に倣い、「～に愛着がある」の愛着と区別するためであるが、論文からの引用の際には、その論文のまま「愛着」という言葉を用いることとする。

Bowlby はアタッチメント行動を説明するために、内的作業モデルという心的な表象を仮定した。内的作業モデルとは、自己と他者に関する表象であり、自分は他者に愛される存在か、また、他者は自分をケアしてくれる存在かという情報を含んでいる (Bowlby, 1973)。この内的作業モデルの違いにより、アタッチメント行動の個人差 (アタッチメント・スタイル) が生まれる。

アタッチメント・スタイル アタッチメント・スタイルについて重要な研究を行ったのは、Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) である。

彼女らは、母子の分離と再会場面を観察することによって、子どものアタッチメント・スタイルを3つのタイプに分類した。すなわち、Aタイプ（回避型）、Bタイプ（安定型）、Cタイプ（アンビヴァレント型）である。この方法は、Strange Situation Procedure（以下、SSPとする）と呼ばれ、アタッチメント研究の先駆けとなった。

SSPでは、観察可能な具体的アタッチメント行動を観察しているが、大人になるにつれ、幼児のようなアタッチメント行動が見られなくなる。そこで、Main & Goldwyn（1984）は、観察可能な行動ではなく、語りの中にあられる養育者の表象を用いてアタッチメント・スタイルの分類を行う、Adult Attachment Interview（以下、AAIとする）を開発した。AAIでは、F型（安定－自律型）、Ds型（アタッチメント軽視型）、E型（とられ型）、U型（未解決型）の4タイプに分類される。この4つのタイプは、SSPの3分類に、Main & Solomon（1990）で明らかにされた、Dタイプ（未組織型）を加えた4分類と対応する。すなわち、BタイプとF型、AタイプとDs型、CタイプとE型、そして、DタイプとU型である。SSPでは、その場にいる養育者への物理的接近を扱っているが、AAIでは想起された養育者への、表象的接近を扱っていると考えられている（安藤・遠藤，2005）。

アタッチメントを応用したアプローチ 遠藤（2010）によれば、Bowlbyはアタッチメントの概念を臨床実践のために導入した。このBowlbyの信念の通り、現在ではアタッチメントや内的作業モデルなど、アタッチメントに関する概念を応用した臨床的アプローチが行われている（中尾・工藤，2005）。概観すると、主に対象とする人物や関係性によって、3つのアプローチに大別されることが考えられる。1つは、主に個人へのアプローチである。例えば、林（2010）では、思春期の子どもとの心理療法において、セラピストがクライアントにとってのアタッチメント対象になることはもちろん、クライアントのアタッチメント・スタイルに応じたセラピストの態度についてまとめて

いる。加えて、心理療法にとって生産的なセラピスト－クライアント関係の形成を、妨げている要因は何かを理解していく必要性についても言及している。また、Brisch（1999 数井・遠藤・北川監訳 2008）もセラピーにおける重要な点について、アタッチメントの観点から述べている。

2つ目は、養育者（主に母親）と子どもの関係へのアプローチである。例えば、Koren-Karie, Oppenheim & Goldsmith（2008 北川訳 2011）は、養育者と子どもの相互作用をビデオに撮影し、その中の短い場面を見ながら、子どもの気持ちや養育者の気持ちや、考えを問うという、Insightfulness Assessmentを行っている。また、Powel, Cooper, Hoffman & Marvin（2002 北川訳 2011）は、Circle of Security（以下、COSとする）という取り組みを行っている。現在、このCOSという取り組みは日本国内でも行われている（例えば、北川，2011，2012）。これらのアプローチの特徴は、ビデオを使ったフィードバックを用いて、養育者の感性や内省力を高め、子どもに安定したケアを提供することを目的としているところであると考えられる。

3つ目は、家族や夫婦を対象としたアプローチである。例えば、Attachment-Based Family Therapy（Diamond, Diamond & Hogue, 2007）や、Attachment-Focused Family Therapy（Hughes, 2007）などがある。また、John Byng-Hallも家族療法や夫婦療法においてアタッチメントを応用している（例えば、Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991 や Byng-Hall, 2001 など）。これらのアプローチでは、面接室内で行われているコミュニケーションや、家族関係の中で経験してきた感情に注目し、不安定なアタッチメント関係をセラピストとの関係を通して修復し、安定したアタッチメント関係を築けるように援助を行う。

以上、対象とする人物や関係によって、アタッチメントを応用したアプローチを3つに大別してきた。これらの中でも、本研究ではJohn Byng-Hallのアプローチや治療理論に注目する。John Byng-Hallは1980年代後半から、家族療法におけ

るアタッチメントの応用に関する論文を執筆し、家族で生じる様々なことをアタッチメントの観点から考察している。加えて、家族スクリプト (Byng-Hall, 1985) という概念を用いて、不安定なアタッチメント・スタイルを持つ人が、養育者となったとき、どのように子どもに影響するかということを検討している (Byng-Hall, 2002)。本研究では、John Byng-Hall の家族療法、夫婦療法のアプローチや治療理論を概観し、アタッチメントを応用した家族の援助について展望を述べる。

家族におけるアタッチメント

家族全体としてのアタッチメント関係：安全家族基地 (Secure Family Base)

Byng-Hall (1995, 2001) は、二者関係におけるアタッチメントだけではなく、家族全体が安定したアタッチメントを築き、機能させている状態を安全家族基地 (Secure Family Base) と呼んだ。安全家族基地とは、“どの年齢の家族メンバーであっても、十分な安心感を持って探索できるように、信頼可能なアタッチメント関係のネットワークを提供する家族 (著者訳)” (Byng-Hall, 1995) のことを意味している。安全家族基地が機能している家族においては、様々な局面で、家族メンバーが協力し合えるような関係が築かれているが、以下のようなアタッチメントの問題が家族内で生じていると、家族メンバーの協力や安心感の獲得は困難になる。

1) **アタッチメント対象を補足すること** アタッチメント対象である養育者が子どもに対して、敏感であり、応答的であるとき、子どものアタッチメント行動に適切に反応することができる。しかし、養育者が自分自身の精神的・身体的な問題や、家族メンバーとの死別などによって、子どもに適切に反応できなくなると、安心感を得るために、子どもはより強固に養育者に接近を試みることがある。このように、アタッチメント対象に過度に接近して、しがみつくことを、John Byng-Hall はアタッチメント対象の補足と呼んだ

(Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991)。

アタッチメント対象の補足を考える際に、重要なことは、この補足関係が単なる養育者と子どもの二者関係ではなく、養育者のパートナーも含めた、様々な家族メンバーから影響を受けて構成されるという点である。Byng-Hall (2008a) では、母親と父親が親密な関係を築くことができず、長男が親のように振る舞い、第二子の長女が母親にしがみつくと (アタッチメント対象の補足) というケースが紹介されている。このケースの中では、父親からのサポートが不足している母親のケアが不安定になり、安心感を十分に得られない長女が母親にしがみつき、長男が両親の親代わりとなり、家族を支えていた。このように、アタッチメント対象の補足は、単なる養育者－アタッチメント対象の二者関係ではなく、家族システムの中で生じているものである。

2) **誤ったアタッチメント対象に頼ること** 一般的には、子どもは養育者に向けてアタッチメント行動を行い、養育者は子どもにケアを提供する。しかし、上記の Byng-Hall (2008a) のケースのような家族関係や、家族の状況によっては、養育者が子どもに頼るという、誤ったアタッチメント関係が築かれることもある (Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991)。Boszomenyi-Nagy & Spark (1973) は、このような関係を、親役割代行 (Parentification) と呼んだ。これは、親子関係の逆転 (Bowlby, 1973) や、親サブシステムへの昇格 (Minu-chin, 1974) などとも類似するが、Byng-Hall (2002) は親役割代行を行う子どもが、ケアの提供者として自信を持っていたり、養育者の友達のようにふるまったりすることはなく、養育者や他の家族メンバーにケアを提供するという点から、誤ったアタッチメント対象へ頼っている状態を、親役割代行の観点から、考察することが多い。

家庭内で、子どもが親を手伝ったり、手助けをしたりするようなことは、日常的に見られることである。親役割代行が、その子どもに破壊的な影響をもたらすか、または、発達の重要な意味を

もたらずかは、子どもが担った役割によって異なる。例えば、小学校高学年ほどの子どもが、忙しい両親に代わって、洗濯をしたり、買い物に行ったりすることは、子どもにとっては生活の技術を高めるという点で、よい経験になるだろう。しかし、このとき、親が子どもに対して、感謝を伝えなかったり、年齢にそぐわないような家事を強いったりしたときは、破壊的な意味を持つこともある。さらに、Byng-Hall (2002, 2008b) が特に強調しているのは、子どもに情緒的なサポートを求めることである。幼い子どもが養育者に対して、情緒的にケアをすることは、子どもにとってかなりの重荷になると John Byng-Hall は指摘している。

3) **アタッチメント行動へ誤った反応をすること** 子どもの示すアタッチメント行動に対して、ほぼ適切に反応するということが、安定したアタッチメント関係を築くために必要である。Bowlby (1973) は、安定したアタッチメント関係を築くためには、アタッチメント対象は利用可能 (available) である必要があると述べた。アタッチメント対象が利用可能であるということは、子どもにとってアタッチメント対象が、応答的であり、近接可能であるということを意味する。しかし、自身が安定したアタッチメント関係の経験が少なかったり、アタッチメント行動への適切なモデルを獲得していなかったりすると、子どものアタッチメント行動に対して、不適切に反応してしまう場合がある (例えば、Byng-Hall, 1990 や Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991)。

子どものアタッチメント行動への不適切な反応について、鈴木・大河原・殿川・藤岡・響 (2011) は、愛着システム不全の仮説モデルを提出している。鈴木ら (2011) によると、“愛着システム不全が起こるときには、子から発せられる生体防御反応としての負情動によって、母親の内臓感覚に不快が生じ、負情動が喚起される。そのため、子の SOS の訴えに対して適切な情動調律が行われず、母は自身の辺縁系を支配している負情動を制御するために必要な行動 (①子にいらだち叱責②子におびえひれふす) をとることとな

る”。すなわち、アタッチメント対象のアタッチメント行動への不適切な反応の一部には、養育者自身の不快情動に対する防衛的な反応が含まれていると考えられる (Byng-Hall, 1990)。

4) **過去の喪失と同様の喪失が起きるかもしれないという予想をすること** 養育者が、過去に何らかの外傷的な経験をし、その問題が未解決なままであると、同様の外傷的な結果を避けようと、家族を行動させることがある (Byng-Hall, 1990)。また、未解決の問題を抱えた養育者は、同様のつらい結果を避けるために、パートナーに特定の役割を取ることを強いることもある (Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991)。これらの結果として、子どもに養育者が安定したケアを提供することが困難になり、安定したアタッチメント関係を築くことが難しくなる。

しかし、過去の喪失を避けるという行動がなぜ、子どもや家族に否定的な影響をもたらすことがあるのだろうか。Byng-Hall & Stevenson-Hinde (1991) は、次のような例をあげて、説明している。“例えば、もし両親がどちらも離婚を経験した家族で育っていた場合、お互いに、離婚を繰り返さないように、過剰な努力をするかもしれない。しかし、離婚への恐れは、情緒的な依存をお互いに回避することにつながり、このような回避行動は結果的に、離婚につながりやすい (著者訳、イタリック体原文まま)”。先述の、愛着システム不全 (鈴木ら, 2011) と同様、未解決の問題への不安や恐れが防衛的反応につながり、家族間の情緒的な交流を妨げてしまうと考えられる。このような過去の未解決な問題と同様の結果を回避している養育者に対して、Byng-Hall & Stevenson-Hinde (1991) は、養育者同士の過去の不安について探求するというアプローチを取っている。

以上、安全家族基地の形成を困難にする、不安定なアタッチメント関係について述べた。Byng-Hall & Stevenson-Hinde (1991) は、アタッチメント対象の補足と誤ったアタッチメント対象への依存を現在の関係性からの影響、アタッチメント行動への誤った反応と過去と同様の喪失が恐れるこ

との予期を、過去からの影響と述べた。アタッチメントを応用した家族の援助には、現在の家族関係と、過去からの影響という2つの視点が必要であると考えられる。

両親間のアタッチメント関係

Hazan & Shaver (1994) によれば、成人の恋愛関係はアタッチメント行動と保護行動、性行動で構成されている。関係が開始した初期には、性行動やアタッチメント行動へのコミットメントが強いが、関係が継続し、親密になっていくと、性行動のコミットメントが減少し、代わりに保護行動へのコミットメントが強くなる。言い換えれば、成人の親密な関係は、お互いにアタッチメント行動と保護行動を行うような関係である。このような関係は、互恵的なアタッチメント関係と呼ばれる (Ainsworth, 1991)。

Byng-Hall (2008a) によれば、両親間のアタッチメント・スタイルは一致しているわけではなく、いくつかの組み合わせが考えられる。中でも、Byng-Hall (1980) は、密着－回避葛藤について言及している。これは、両親間のアタッチメント・スタイルが回避型ととらわれ型である場合に生じやすい葛藤である。この葛藤状態では、一方が回避すると、他方がしがみつき、反対に一方がしがみつくと、他方が回避するというものである。そして、この葛藤は第三者を巻き込むことが多く、葛藤を解決する役割を子どもが担うことがある (Hoffman, 1975)。

Byng-Hall (2008a) は両親間の葛藤が激化することを防ぐために、家族内で生じることを3点示した。1つは、両親の葛藤が激化することを防ぐために、子どもが何らかの身体症状や問題行動を起こし、両親を結び付けるということである。この方略のもとでは、両親は表面的には協力しているように見えるが、安定したアタッチメント関係を有していない。2つ目は、葛藤の鎮静化のために、一方の親が子どもと強く結び付き、もう一方の親と敵対するということである。この方略では、両親と子どもの世代間境界が不明瞭になり、両親が安定したケアを提供することが困難にな

る。3つ目は、子どもが親役割代行を行うということである。前項で述べた通り、親役割代行は子どもにとって大きな重荷になることもある。子どもの問題とともに、両親間の葛藤が見られる場合は、子どもが果たしてきた役割に気づき、中釜 (2010) が言うように健全な両親連合を作り上げる必要があるだろう。

アタッチメントを応用した家族療法の実践

面接の導入

面接の申し込み 面接の申し込みがあると、Byng-Hall (2001) は10分以上の時間が確保できるときに、できるだけ早く連絡することを述べている。そして、電話の中で、両親に話を聞き、家族全員が問題に影響しているということを強調する。この電話によって、家族メンバーが面接に来なくなるということを減少させることができる。

初回面接 初回面接で John Byng-Hall が重視しているところは、家族メンバー全員がセラピストの利用可能性を理解できるように、来所者全員との間に温かいつながりを持つということである (Byng-Hall, 2001)。加えて、幼い子どもであっても、合同で面接を行うことを勧めている。そのため、John Byng-Hall は子どものための玩具は、最初のうちは置かないほうがよいと考えている。

面接という場面は、多くの家族にとって新奇場面である。新奇場面は、家族に対して何らかのアタッチメント行動を取らせる。Byng-Hall (1990) は、初回面接において面接室へ入室した際、家族メンバーがそれぞれどのような行動を取るかということを観察することを勧めている。また、席順や、席順を決めるやり取りなども重要な情報を与えてくれる。例えば、親役割代行をしている子どもは、両親の座る位置を指示し、両親の間に割って入るような座り方をした (Byng-Hall, 2008a)。

面接の進め方

面接の構造 Byng-Hall (2001) は、1セッションを90分としている。この面接時間により、家

族は1セッションで多くの情報を伝えてくれる。さらに、John Byng-Hallはセッションの最後の30分は、50分1セッションにするよりも3倍の価値があると考えている。

また、面接を開始して間もないうちは、毎週、面接を設定する。これは、セラピストとのアタッチメント関係を築くためである (Byng-Hall, 2001)。反対に、面接が開始してしばらくすると、面接の頻度を下げ、家族内でアタッチメント行動とそれに対するケアが行われるように促す。

セラピストの態度 セラピストの態度について、Byng-Hall (2001) は、“家族療法家は、誰かの立場に立ったり、誰かを打ち負かしたりするのではなく、両親と子どもの関係を支援する、よい祖父母に似ている”と考えている。これは、単に家族にとって中立的な姿勢を取るということとは異なる。このような姿勢は家族療法家の中では、多方向への肩入れと呼ばれる (Boszomenyi-Nagy & Spark, 1973)。中釜 (2008) は、多方向の肩入れについて、“中立性とも異なる概念で、一人ひとりに感情的に巻き込まれずいることで全員と等しい距離を保つ代わりに、一人ひとりの言い分にしっかり耳を傾けることによって、全員から等距離に立とうと努める。面接の参加者だけでなく、面接には姿を見せないが、家族にとって重要な登場人物たちのナラティブにも積極的関心を寄せる。それによって家族は、公平性が貫かれ異質性が尊重されるらしいと経験し始める (pp.115-116)”と述べている。このようなセラピストの態度によって、家族個々人がセラピストから安心感を得ることができると考えられる。

加えて、セラピストがすべての家族メンバーにとって、安全基地となるということが随所で強調されている (例えば、Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991 や Byng-Hall, 2001 など)。セラピストが、家族メンバーそれぞれにとっての安全基地となることは、単に安心感を与えるためだけではない。Bowlby (1988) によれば、子どもは安全基地 (安定したアタッチメント関係) を有していると、安心感を持って周囲の探索行動を行うことで

き、青年期になるとその探索行動はさらに広がる。家族療法においては、セラピストが安全基地となることで、各メンバーの探索行動が広がっていくと考えられる。このことについて、渡辺 (2000) も、乳幼児と母親の心理療法においては、セラピストと母親の関係が安全基地の役割を果たし、セラピストへの陽性転移をもとに、祖母や実母との信頼関係が築かれると述べている。

John Byng-Hallが家族全員をサポートし、家族全員のアタッチメント対象となることを強調しているのは、家族が自分たちで問題解決を行えるように、セラピストが安心感を与え、問題に対する探索行動を行えるようにするためであると考えられる。

面接の終結

Byng-Hall (2001) によれば、多くのケースでは3カ月から6カ月 (セッション数6回から16回) で終結する。重大な問題を抱えたケースでは、18カ月から3年にわたることもある。いずれの場合でも、Byng-Hallが明確に家族に伝えることは次のことである。すなわち、今後、また問題を抱えたときは話し合うことができるという点である。言い換えれば、“比較的、短期の介入を提供しているが、私自身は、長期間、利用可能にしておく (著者訳)”のである (Byng-Hall, 2001)。

総合考察

本論文では、家族における不安定なアタッチメント関係や、アタッチメントを応用した John Byng-Hall の家族療法について概観してきた。総合考察においては、家族を理解するために、アタッチメントがどのように有効であるのかを考え、そのうえで、アタッチメントを応用した家族療法について述べる。

アタッチメントの観点からの家族の理解

本論文で述べてきたように、家族における不安定なアタッチメント関係は、単なる二者関係に影響するだけではなく、第三者を巻き込んだり、安全家族基地を機能不全状態にしたりする。Byng-

Hall (2001) は、家族の問題は、アタッチメントに関する問題がすべてであるとは言えないが、アタッチメント関係が他の問題と相互に影響していると述べている。

また、既存の家族療法に関する概念との関連として、Minuchin (1974) の適応的な家族、離散家族、纏綿家族は、それぞれ安定型、回避型、とらわれ型のパターンと対応すると述べられている (Marvin, 2003)。しかし、家族をアタッチメントの観点から理解することは、単にこれまでの概念を言い換えたものではない。林 (2010) は、セラピーにおいて、セラピストとクライアントの生産的な関係形成を妨げる特徴は何か、そして、それを乗り越えて安定した関係を築いていけるかという動的なモデルが必要であると述べている。アタッチメントの観点からの家族理解は、アタッチメント・スタイルがどのように形成され、維持されてきたのかということや、安定したアタッチメント関係の形成を妨げているものは何か、どのような親密さへの恐れ (Weeks & Treat, 2001) があるかということなどから、家族を理解することができるのではないだろうか。

アタッチメントと家族療法

本論文では、John Byng-Hall の家族療法理論や家族におけるアタッチメントの重要性について、概観してきた。John Byng-Hall が最も強調していることは、家族全員にとってアタッチメント対象になるということである (例えば、Byng-Hall, 1995 や Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991)。その具体的な方法として、できるだけ早く申し込みの電話を折り返したり、家族全員に話しかけたりするという方法がある (Byng-Hall, 1995)。また、態度として敏感で共感的、かつ、問題に立ち向かう強さを持つことを重視している (Byng-Hall, 2001)。これらはすべて、家族に対して、セラピストの利用可能性 (Bowlby, 1973) を高めるためであると考えられる。

John Byng-Hall は、不安定なアタッチメント関係について、過去の経験から影響を受けているものと、現在の家族関係から影響を受けているもの

について言及している (Byng-Hall & Stevenson-Hinde, 1991)。また、両親が自分の親から受けた養育がどのくらい今の自分たちの考え方や行動に、影響しているかを探求することの重要性についても述べている (Byng-Hall, 2008a)。John Byng-Hall は、世代間で受け継がれている役割の期待という点を強調し (Byng-Hall, 1985)、アタッチメントを家族療法に応用していると考えられる。しかし、世代を通じて受け継がれてきた不安定なアタッチメント関係や期待のほかに、家族の発達とともに訪れる、安定したアタッチメント関係を脅かす危機にも注目する必要があるのではないだろうか。

例えば、思春期の子どもがいる家族においては、これまでの家族関係を見直し、子どもがさらに探索行動を行えるように、家族関係を再構築する必要があるだろう (北島, 1994)。また、Eliot (1955) が入会の危機、退会の危機と言ったように、家族メンバーが増えたり、減ったりする際には、たとえ安定したアタッチメント関係を有していたとしても、不安定なアタッチメント関係に変化する可能性がある。このように、今後は、アタッチメントを応用した家族療法に、家族の発達という視点を取り入れていく必要があるだろう。加えて、家族の発達段階のどこで、どのようなアタッチメント関係の危機が生じるのかということ、臨床的な知見や、家族関係を長期にわたって調べる縦断的な研究から、まとめていくことが必要になるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S. (1991). Attachment and other affectional bonds across the life cycle. Parkes, C. M., Stevenson-Hinde, J. & Maris, P. (eds.) *Attachment across the life cycle* London: Routledge. pp.33-51.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

- 安藤智子・遠藤利彦 (2005). 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントー生涯にわたる絆ー ミネルヴァ書房 pp.127-173.
(Ando, S & Endo, T, 2005)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss. vol. 2: Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss. Vol. 3: Loss*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base — Parent-Child Attachment and Healthy Human Development*. New York: Basic Books.
- Boszomenyi-Nagy, I. & Spark, G.M. (1973). *Invisible loyalties: Reciprocity in intergenerational family therapy*. New York: Harper & Row.
- Brisch, K.H. (2002). *Treating Attachment Disorders: From theory to Therapy*. New York: Guilford Press.
(ブリッシュ, K.H. 数井みゆき・遠藤利彦・北川恵 (監訳) (2007): アタッチメント障害とその治療ー理論から実践へー 誠信書房)
(Kazui, M., Endo, T. & Kitagawa, M. 2007)
- Byng-Hall, J. (1980). The symptom bearer as marital distance regulator: Clinical implications. *Family Process*, **19**, 355-365.
- Byng-Hall, J. (1985). The family script: A useful bridge between theory and practice. *Journal of Family Therapy*, **7**, 301-305.
- Byng-Hall, J. (1986). Family scripts: A concept which can bridge child psychotherapy and family therapy thinking. *Journal of Child Psychotherapy*, **12**, 3-13.
- Byng-Hall, J. (1990). Attachment theory and family therapy: A clinical view. *Infant Mental Health Journal*, **11**, 228-236.
- Byng-Hall, J. (1995). Creating a Secure Family Base: Some Implications of Attachment Theory for Family Therapy *Family Process*, **34**, 45-58.
- Byng-Hall, J. (2001). Attachment as a Base for Family and Couple Therapy *Child Psychology & Psychiatry Review*, **6**, 31-36.
- Byng-Hall, John. (2002). Relieving Parentified Children's Burdens in Families with Insecure Attachment Patterns *Family Process*, **41**, 375-388.
- Byng-Hall, J. (2008a). The crucial roles of attachment in family therapy *Journal of Family Therapy*, **30**, 129-146.
- Byng-Hall, J. (2008b). The significance of children fulfilling parental roles: implications for family therapy *Journal of Family Therapy*, **30**, 147-162.
- Byng-Hall, J. & Stevenson-Hinde, J. (1991). Attachment Relationships Within a Family System *Infant Mental Health Journal*, **12**, 187-200.
- Diamond, G.M., Diamond, G.S. & Hogue, A. (2007). Attachment-Based Family Therapy: Adherence and Differentiation. *Journal of Marital and Family Therapy*, **33**, 177-191.
- 遠藤利彦 (2010). アタッチメント理論の現在：生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う *教育心理学年報*, **45**, 150-161.
(Endo, T. (2010). Current Trends in Attachment Theory: A Review from Life-Span Developmental and Clinical Perspectives. *The Annual Report of Educational Psychology in Japan*, **45**, 150-161.)
- Eliot, T.D. (1955). Handling Family Strains and Shocks Becker, H, & Reuben, H. (eds.) *Family, Marriage and Parenthood*. Boston: Heath and Co. pp.616-640.
- 林もも子 (2010). 思春期とアタッチメント みすず書房
(Hayashi, M. 2010)
- Hazan, C. & Shaver, P.R. (1994). Attachment as an Organizational Framework for Research on Close Relationships. *Psychological Inquiry*, **5**, 1-22.
- Hoffman, L. (1975). Enmeshment and the too richly cross-joined system. *Family Process*, **14**, 457-468.
- Hughes, D.A. (2007). *Attachment-Focused Family*

- Therapy* New York • London : Norton & Company.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2005). なぜ、今、アタッチメントなのか 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントー生涯にわたる絆ー ミネルヴァ書房 pp.i-iii.
(Kazui, M & Endo, T, 2005)
- 北川恵 (2011). アタッチメントに基づく親子関係支援ー The Circle of Security programに参加した2歳男児と母親の変化ー 日本心理臨床学会第30回大会論文集, **94**.
(Kitagawa, M. 2011)
- 北川恵 (2012). 養育者支援ーサークル・オブ・セキュリティ・プログラムの実践 数井みゆき (編) アタッチメントの実践と応用ー医療・福祉・教育・司法現場からの報告 誠信書房 pp.23-43.
(Kitagawa, M. 2012)
- 北島歩美 (1994). 思春期の子どもの変化に伴う家族の変化 東京大学教育学部紀要, **33**, 125-133.
(Kitazima, A. (1994). Family Tranitions with Puberty Change. The university of Tokyo, **33**, 125-133.)
- Koren-Karie, N, Oppenheim, D. & Goldsmith, D.F. (2008). Keeping the Inner World of Child in Mind: Using the Insightfulness Assessment with Mothers in a Therapeutic Preschool. Oppenheim, D. & Goldsmith, Douglas, F. (eds.). *Attachment theory in clinical work with children bridging the gap between research and practice*. pp.31-57.
(コレンーカリー, N, オッペンハイム, D. & ゴールドスミス, D.F. 北川恵 (訳) (2011) 子どもの内的世界を心に留めておけることー治療的幼稚園における母親への洞察力のアセスメント 数井みゆき・北川恵・工藤晋平・青木豊 (訳) アタッチメントを応用した養育者と子どもの臨床 ミネルヴァ書房 pp.39-70.)
- Main, M. & Goldwyn, O. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Berkely: University of California.
- Main, M. & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented During the Ainsworth Strange Situation. Greenberg, D.C. & Cummings, E.M. (eds.). *Attachment in the preschool years*. Chicago: University of Chicago Press. pp.161-182.
- Minuchin, S. (1974). *Families and Family Therapy*. Boston, MA: Harvard Press, and London: Tavistock.
- Marvin, R, S. (2003). Implications of attachment research for the field of family therapy. Erdman, P, & Caffrey, (eds.). *Attachment and Family Systems: Conceptual, Empirical and Theraputic Relatedness*. New York and Hove: Brunner-Routledge.
- 中金洋子 (2008). 家族合同面接を開始する 中金洋子 (著) 家族のための心理援助 金剛出版 pp.102-120.
(Nakagama, H. 2008)
- 中金洋子 (2010). 親カウンセリング再考 中金洋子 (著) 個人療法と家族療法をつなぐー関係系思考の実践的統合 東京大学出版会 pp.145-183.
(Nakagama, H. 2010)
- 中尾達馬・工藤晋平 (2007). アタッチメント理論を応用した治療・介入 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 pp.131-165.
(Nakao, T. & Kudo, S. 2007)
- Powel, B., Cooper, G., Hoffman, K. & Marvin, R., (2008). The Circle of Security Project: A case study - 'It hurts to give that which you did not receive'. Oppenheim, D. & Goldsmith, Douglas, F. (eds.) *Attachment theory in clinical work with children bridging the gap between research and practice*. pp.172-202.
(パウエル, B., クーパー, G., ホフマン, K. & マービン, R., 北川恵 (訳) (2011) サーク

ル・オブ・セキュリティという取り組み—事例研究：自分がもらえなかったものを与えることはつらいよね— 数井みゆき・北川恵・工藤晋平・青木豊（訳）アタッチメントを応用した養育者と子どもの臨床 ミネルヴァ書房 pp.205-246.)

鈴木廣子・大河原美以・殿川圭子・藤岡育恵・響江吏子 (2011). 母子の愛着システム不全評価尺度の作成 (1) —2歳児における質的データの分析— 東京学芸大学紀要総合教育科学系

I , 62, 211-255.

(Suzuki, H, Ohkawara, M, Tonokawa, Y, Fujioka, I. & Hibiki, E. 2011)

渡辺久子 (2000). 少子化時代の精神療法 渡辺久子（著）母子臨床と世代間伝達 pp.37-46.

(Watanabe, H. 2000)

Weeks, G.R. & Treat, S.R. (2001). *Couples in Treatment, 2e: Techniques and Approaches for Effective Practice*. New York: Taylor & Francis Group.

—— 2012. 10. 2 受稿, 2012. 12. 2 受理 ——